

# 精神科デイケア・障害福祉サービス施設での 看護学生の学び

日野 雅洋・石橋 照子・大森 眞澄・藤井 明美\*  
松谷ひろみ

## 概 要

目的は、精神障がい者への支援施設での演習による看護学生の学びを明らかにすることである。島根県立大学の2017年度3年次前期学期の精神地域看護論の履修生85名のうち、同意者59名を対象とした。訪問報告書からデータを取り出した後、整理分類し抽象度を高める分析を行った。【精神障がい者への理解】【支援施設の実際の役割】【精神障がい者への支援策】のカテゴリが示された。学生は、多様な施設役割を理解でき、精神障がい者への理解も深まったため、視野を広げ精神障がい者への支援を考えられるようになった可能性がある。意図した学びが示せるよう実習や演習を組み込む必要があると考える。

キーワード：精神障がい者、精神科デイケア、障害福祉サービス、  
学生の学び

## I. はじめに

厚生労働省(2004)は精神障がい者の地域での生活について、「入院医療中心から地域生活中心へ」という方策の推進を示している。これにより「精神障害者地域移行・地域定着支援事業」や「精神障害者アウトリーチ推進事業」などの事業を展開している(厚生労働省, 2011)。このような事業によって、入院生活を余儀なくされていた精神障がい者の地域生活が促進され、これまで精神障がい者が取り巻かれていた状況が改善されることが期待されている。看護職はその一助として、地域での精神障がい者への直接的な支援と共に、入院している精神障がい者への支援においても地域移行を視野に入れた看護実践を展開していく必要性が高まるものと考え

られる。

島根県立大学看護学科の科目である精神地域看護論では、地域で生活する精神障がい者への支援施設の日中業務を一日見学体験する演習を学生に課している。学生はこの演習のおよそ3ヶ月以降に精神看護学実習で精神障がい者を受け持つことになる。演習のねらいは、学生が受け持つ精神障がい者の社会生活に向けた支援を考えていけるための力を身につけることと共に、施設を利用しつつ地域で生活する精神障がい者を学生が理解することである。学生は、実習前に地域で生活している精神障がい者とあらかじめ接することで、これからの生活を想像できるようになり、精神看護学実習で出会う精神障がい者への柔軟な支援策を考えられるようになる。

先行研究では、学生は精神科デイケアや就労支援施設に訪問することで、精神障がい者の地

---

\* 元島根県立大学

域での生活を支えるケアを理解できるようになると示されている(加藤, 2007; 柿澤ら, 2015)。この演習での学びとして、先行研究で示されている学びと共に、ねらいとしている学びが得られているのか検討していくことによって、より充実した演習のあり方が模索できると考えた。

## Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、精神科デイケアや障害福祉サービスを提供する施設で演習を行った学生の学びを明らかにすることである。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 研究対象者

精神地域看護論の施設訪問演習では、学生が精神障がい者への精神科デイケアや障害福祉サービスを提供する施設13施設のうち教員が割り当てた一施設の日中業務を一日見学体験し報告書をまとめている。この科目を履修し、2017年7月から8月にかけて実施した演習において報告書をまとめ上げた看護学生85名のうち、研究協力の依頼に同意が得られた学生を研究対象者とした。

### 2. データ収集方法

報告書は履修した学生全てが提出するものであることから、その中で同意が得られた学生の学びや感想が記されている報告書を収集した。

### 3. 分析方法

学生の学びが記されている文脈に焦点を当て質的帰納的に分析した。報告書の内容を精読し、文脈から学生の学びとして意味のあるまとまりを取り出しデータとした。その後、個々のデータの類似性に従って分類し、内容の抽象度を高め、カテゴリを形成していった。なお、研究者間で分析結果を共有した。

### 4. 倫理的配慮

学生に対して本研究の趣旨等を文書で示し、同意が得られた学生の報告書を分析した。研究

者が報告書の評価をする立場であったため、研究の説明や同意を得る時期は、学生が成績への影響を気にせず自由意思による表明ができるように報告書の評価後に設けた。また、同意後の辞退が可能であること、その場合に不利益は受けないことを保証した。島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号218)。

## Ⅳ. 結 果

研究に同意が得られた学生は、履修生85名のうち59名であった。報告書より取り上げた学生の学びとして意味を有するデータは118データであった。類似性に従って抽象度を高めることによって、13サブカテゴリ、3カテゴリが形成された(表)。以下、カテゴリは【 】、サブカテゴリは〈 〉、データは「 」で示す。

### 1. 精神障がい者への理解

このカテゴリは、学生がこれまでの生活に関わることの少なかった精神障がい者への理解を深めている様を示すカテゴリであり、3つのサブカテゴリで構成された。

#### 1) 精神障がい者へのネガティブイメージの変化

精神障がい者に抱いていたネガティブイメージについて、実際に関わることで変化したことを示していた。

「今までの関わりづらい、怖いといったイメージと大きく異なっていることを学んだ。障がいを持っていても、一般の方と一緒にのアパートに住んでおられ、トラブルはほとんどないということを知った」など15のデータがあった。

#### 2) 精神疾患を抱えていない人との違いのなさ

これまで精神障がい者とそうでない人とは違いがあるものと感じていた学生が、自分が感じていたほど違いが無いことを学んだことを示すものであった。

「事業所を利用しておられる方たちは精神疾患を抱えていることが全くわからず、病気を抱えていない人と変わらないということを学んだ」など5つのデータがあった。

#### 3) 目標を持って通所する様子

表 精神科デイケア・障害福祉サービス施設での看護学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	データ数
精神障がい者への理解	精神障がい者へのネガティブイメージの変化	15
	精神疾患を抱えていない人との違いのなさ	5
	目標を持って通所する様子	10
支援施設の実際の役割	利用者との関係形成の方法	11
	強みを引き出す必要性	6
	多職種や社会との連携の必要性	8
	地域移行に向けたプログラムの理解	7
	症状悪化への早期介入の必要性	2
	精神障がい者の主体性を大切とした支援策	13
	利用者の居場所としての施設の重要性	13
	偏見や固定観念にとらわれず関わる必要性	10
精神障がい者への支援策	コミュニケーション方法のあり方	4
	退院後を見据えた病院での支援の必要性	3
	理想とする支援のイメージ化	11

利用者が通所することで目指す目標を理解したことを示していた。

「利用者の方々には自分の疾患について受けとめて、将来に希望を持って生活していることが分かった。」など10のデータがあった。

## 2. 支援施設の実際の役割

訪問した施設についての役割を、講義で覚えるよりも実際に訪問することで具体的な理解に至ったカテゴリであった。7つのサブカテゴリで構成された。

### 1) 利用者との関係形成の方法

このサブカテゴリは、学生が、施設スタッフの実施している利用者との関係形成方法を見学して、意味づけをしたサブカテゴリであった。

「支援者は作業中に気になることがあった場合、利用者に注意ではなくお願いをするという形で伝えておられ、このような関わりをすることによって、利用者も受け入れることができ、両者の良好な関係を築くことができるのだと思いました」など、11のデータがあった。

### 2) 強みを引き出す必要性

精神障がい者としてみると問題ばかりに目を向けがちであったが、強みに着目し引き出す必要性を学んだものであった。

「先入観を持たずに、個人として捉えられるようにしたいと思い、その人の持つ強みを引き出せるように関わっていこうと思うことができた」など、6つのデータがあった。

### 3) 多職種や社会との連携の必要性

社会での生活を見据えた社会復帰施設であり様々な職種が利用者を支えるために連携していることを学んでいたサブカテゴリであった。

「施設、病院、家族、市町村など多職種が連携し支援することで、家族が本人の病状を理解し受け入れること、家族をはじめ周囲の人々が、生活者として本人を理解していくことになり、障害を持つ人々の暮らしやすい生活につながるのではないかと考えた」など8つのデータがあった。

#### 4) 地域移行に向けたプログラムの理解

施設のプログラムでは様々なプログラムが盛り込まれており、それらは社会復帰に向けたプログラムであるということを理解していた。

「このようなプログラムを楽しみに参加されている方も多いのではないかと考えたし、その楽しさが日々の生活を充実なものにし社会復帰に向けたコミュニケーション能力の向上、引きこもりや病気の悪化を防止することにつながると考えました」など7つのデータがあった。

#### 5) 病状悪化への早期介入の必要性

精神障がい者の症状悪化は早期発見によって重篤化を防ぎえる可能性があり、施設では早期介入が必要であることを学んだものであった。

「疾病や障がいに関するその人の症状や変化の観察等が重要であり、問題があった場合には、早期介入により利用者の方の地域での生活を支える役割があると考える」など、2つのデータがあった。

#### 6) 精神障がい者の主体性を大切とした支援策

施設での支援策において、主体的行動に結びつくよう精神障がい者の気持ちを尊重した支援の必要性を学んだものであった。

「施設のスタッフの方の利用者との関わり方を見ると、個々のペースや症状に合わせた関わり方、地域での生活を考えた上での支援の仕方をしていて、このような関わりがあるからこそ障害を持つ人が自立に向かうことができると感じた」など、13のデータがあった。

#### 7) 利用者の居場所としての施設の重要性

仲間と談笑したり、生活リズムを作る一躍を担っていたりしている様子を見学し、利用者の居場所として施設が重要であることを学んだも

のであった。

「少しでも周りの支援があればみんなと同じように生活を送ることができ、話をしたり、仲間がいるという居場所があるということを感じることができれば、より生活のしやすい環境になるのではないかと考えた」といったデータなど、13のデータがあった。

### 3. 精神障がい者への支援策

精神障がい者と接したり、施設のスタッフの支援策を見聞きすることによって、自らが行うべき精神障がい者への支援策を考えたカテゴリであり、4つのサブカテゴリが含まれていた。

#### 1) 偏見や固定観念にとらわれず関わる必要性

自らや社会が抱く偏見や固定観念が精神障がい者への必要な支援を阻害してしまう可能性を考え、とらわれずに関わる必要性を考えたものであった。

「精神障がい者に対して怖いといったイメージを持っていたが、頑張ってリハビリをして、コミュニケーションをとってみると、とても優しい心を持っていることが分かった。これから、精神疾患についての知識を十分に深め、偏見や固定観念にとらわれることなく関わっていきたい」など、10のデータがあった。

#### 2) コミュニケーション方法のあり方

症状や向精神薬の副作用によってコミュニケーションに困難を来す場合がある。

「何を求めているのかうまく伝えることができない方もいるので、誘導はせずニーズを聞き出す力が必要だと感じました」など、コミュニケーションのあり方を考えたものであり、4つのデータがあった。

#### 3) 退院後を見据えた病院での支援の必要性

病院を退院した後の生活のあり方を見学することによって、病院での支援について考えたものであった。

「病院で入院している患者さんもしずれは支援センターに来られている人たちのように、地域で生活していくということを想像しながら援助を行っていくことが大切だと学びました」など、3つのデータがあった。

#### 4) 理想とする支援のイメージ化



精神障がい者に関わることによって、この先看護職として支援する自分のあり方を具体的にイメージしたサブカテゴリであった。

「精神障がい者と関わっていくにあたって、障がい者に目を向けるのではなく、まずはその人に目を向けて強みは何なのか、環境の強みは何なのかを見つける努力をしながら関わっていきたいと思います」など11のデータがあった。

## V. 考 察

学生は、一日の演習で精神疾患患者に接する中で【精神障がい者への理解】を学び、施設に訪問することで講義で学んだ以上に【支援施設の実際の役割】について学んでいた。また、看護職として自らが支援者となることを想像し【精神障がい者への支援策】も学んでいた。このように学生が多様に学び得ていることが明らかになった。これらの学びを踏まえ、ねらいとしている学びが得られているのか、また、この演習のあり方について考察する。

まず、【精神障がい者への理解】では〈精神障がい者へのネガティブイメージの変化〉、〈精神疾患を抱えていない人との違いのなさ〉、〈目標を持って通所する様子〉といった学びが示された。これらは、学生がこれまで関わったことのない精神障がい者と初めて交流し、従来もっていた精神障がい者への先入観が変わったことを示す学びであったと言える。川村ら(2015)は、精神看護学実習を通して精神疾患患者に対する先入観や偏見が減少したと報告している。看護師は精神障がい者を正しく理解することが求められる職種である。演習は学生に精神障がい者の正しい理解を促す一手段であると言える。一方で、不安傾向のある学生は、実習初日からの患者に対する否定的感情が持続するため学びに影響があると指摘している報告(松本ら, 2011)もある。このような学生は、精神看護学実習期間での患者-看護師関係の進展を図り難く、実習での成果を挙げるのは困難になると思われる。本学の演習のように早い時期に演習を設けることは、不安傾向のある学生が実習で多くの学びを得ることに繋がるのではないかと考えら

れた。

次に、【支援施設の実際の役割】で示されたものは、精神科デイケアや障害福祉サービスの多様な役割を考えていたものであった。石橋ら(2018)は、精神科デイケアや就労支援施設での演習によって、学生が、スタッフの強みを活かす関わりや主体性を育む関わり、精神障がい者にとって安心していられる場であることを学んでいたことを明らかにしている。本研究でも〈強みを引き出す必要性〉、〈利用者の居場所としての施設の重要性〉、〈精神障がい者の主体性を大切とした支援策〉という同様の結果が示された。また、〈利用者との関係形成の方法〉、〈多職種や社会との連携の必要性〉、〈地域移行に向けたプログラムの理解〉、〈症状悪化への早期介入の必要性〉においても、先行研究(吉野ら, 2007; 山田ら, 2010)で類似した結果が示されている。【支援施設の実際の役割】という学びは、このような施設に訪問する実習や演習での学びとしてあらわれるべき結果であると考えられた。

【精神障がい者への支援策】は、学生が自らが支援することを考えたものであり、看護職としての自らのあり方が培われた学びであったと言える。特に〈退院後を見据えた病院での支援の必要性〉は、精神障がい者への支援の視野を広げている。精神看護学実習後の施設実習による学びを示した先行研究とは、異なる学びであった。社会生活に向けた支援を考えていくための力を身につけるといふ、この演習のねらいに沿った結果が得られていると考える。一方で、精神看護学実習では、学生が精神疾患患者と関係を構築し、それを発展させ支援できるようになる(田村ら, 2016)。この演習では、精神障がい者と関係を構築し支援することまでは出来ていない。演習に限った学びとせず、学生がこの後の精神看護学実習でどのように学びを活かすことができたのか検討することも必要だと考えられた。

## VI. 本研究の限界と今後の可能性

この研究における分析は、一日の演習での学生の報告書を分析したものであった。そのため

に、限られた文字数の中で、評価を意識した記載である可能性が考えられ、学生の学びの全てを分析できているとは言い難い。

また、この演習の学びを精神看護学実習にどのように活かせたのか今後明らかにすることによって、精神看護学実習より前の時期に施設での演習を設けることの意義を示せるものと考ええる。

## Ⅶ. 結 論

本研究では【精神障がい者への理解】、【支援施設の実際の役割】、【精神障がい者への支援策】という支援施設を訪問した学生の学びを明らかにした。短い訪問時間であったものの学生は精神科デイケアや障害福祉サービスの多様な役割を理解できたと考えられた。そして、精神看護学実習よりも前の時期に演習を設けることによって、精神障がい者への理解が深まり、視野を広げ精神障がい者への支援を考えられるようになった可能性がある。一方で、関係を構築し支援していくことは出来なかった。意図した学びが示せるように精神科デイケアや障害福祉サービスを提供する施設での演習と精神科病棟での実習の設ける必要があると考えられた。

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文 献

石橋照子, 大森眞澄, 松谷ひろみ (2018): 精神障がい者のエンパワメント支援を学ぶための教育プログラムの検討, 日本医学看護学教育学会誌, 26 (3), 61-69.

柿澤美奈子, 田仲高政, 塚田縫子 (2015): 精神看護学実習における精神科デイケアおよび就労継続支援 B 型事業所での学生の学び, 佐久大学看護研究雑誌, 7 (1), 25-34.

加藤知可子 (2007): 精神障害者小規模作業所を用いた精神看護実習に関する検討, 日本医

学館語学教育学会誌, 16, 27-30.

川村晃右, 山本明弘 (2015): 精神科スーパー救急病棟における精神看護学実習を通じた学生の「学び」, 明治国際医療大学誌, 12, 27-31.

厚生労働省 (2004): 精神保険医療福祉の改革ビジョン, 閲覧日 2018 年 8 月 29 日,  
<https://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/vision.html>

厚生労働省 (2011): 精神障害者の地域移行について, 閲覧日 2018 年 8 月 29 日,  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/chiiki.html>

松本賢哉, 酒井郁恵, 森千鶴 (2011): 精神科臨地実習における学生の不安と患者関係との関連, 明治国際医療大学誌, 4, 15-21.

田村裕子, 児玉豊彦, 小森照久 (2016): 精神看護学実習における看護学生の体験と学び, 三重看護学誌, 18 (1), 23-30.

山田浩雅, 中戸川早苗, 糟屋久美子, 他 (2010): 精神科デイケア・小規模作業所における地域精神看護学実習の学び, 愛知県立大学看護学部紀要, 16, 23-30.

吉野賀寿美, 佐久間えりか, 佐々木宏美, 他 (2007): 社会参加を支える施設での実習を通しての学生の学び, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 14, 57-64.

# **Learning of Nursing Students at Psychiatric Day-Care and Obstacle welfare Service Facility**

Masahiro HINO, Teruko ISHIBASHI, Masumi OMORI, Akemi FUJII\*,  
and Hiromi MATSUTANI

Key Words and Phrases : People with mental disorder, Psychiatric day-care,  
Welfare service, Student learning

---

\*Former, The University of Shimane